



発行所
特定非営利活動法人
JYMA日本青年遺骨収集団
 〒102-0076 東京都千代田区五番町2
 番町バレス303号室
 TEL03-6268-9939
 FAX03-3239-0109
 URL : http://www.jyma.org
 e-mail : info@jyma.org
 発行人 山口 美朝
 編集人 山口 葵

第四次硫黄島派遣隊 帰還!!
集団埋葬地から四八二柱をお迎えす!!!



去る、平成二十三年二月十四日、政府主催の「硫黄島戦歿者遺骨帰還団」が、初冠雪となった東京へ帰還した。今回の第四次硫黄島戦歿者遺骨収容は、来年度から実施される硫黄島における戦歿者遺骨収容の早期解決にむけ、菅首相の推進する硫黄島特命チームによる情報をもとに実施され、四百八十一柱をお迎えした。今次派遣は、その試金石として、当法人に、多くの若者を現地に投入することにより、作業手順の分担や、進捗能率などを推し量るために、例年には無い大人数での派遣協力が依頼さ

れ、十八名での参加となった。海上自衛隊硫黄島基地の例年には無い非協力的、日常行動制約下で、刑務所並の日常生活を強いられることになったものの、平成二十二年度に実施された第一次から第三次までの派遣でお迎えした三百四十一柱と合わせ、八百二十二柱のご遺骨を本土にお迎えすることになった。

先発隊 一月二十七日出発

遠藤 剛史 東海大学 三年
 山際 嵩之 中央大学 一年

後発隊1班 一月二十八日出発

松井 聡 明治学院大学三年
 池田 祥子 会社員

後発隊2班 二月三日出発

濱 修一(硫黄島御遺族) 会社員
 水野谷 友一 国士舘大学一年
 赤瀬 一紀 国士舘大学一年
 白石 昇平 社会人
 大西 利典 明治学院大学大学院
 富岡 賢一 国士舘大学三年
 西口 和成 社会人

秋山 弥彦 社会人
 河上 寛人 日本大学四年
 中山 亜理沙 フェリス学院大学四年
 大塚 和美 社会人
 根本 祐介 自営業
 水上 大輔 会社員
 大野 義彦 靖国神社 神官

帰還した翌日の二月十五日には、千鳥ヶ淵戦歿者墓苑にて遺骨引渡式が行われた。当日は菅直人総理大臣を始め、松本防衛政務官、岡本厚生政務官、阿久津前厚生政務官など、多くの政府関係者が来場した。菅首相が遺骨引渡式に出席するのは厚生労働大臣の頃を通じても今回が初めてであった。



献花をする菅首相

第四次硫黄島派遣報告文

若い世代が今後につなげていくために



隊長

中山 亜理沙

(フエリス女学院大学四年)

平成二十三年一月二十六日から二月十五日まで第四次硫黄島戦没者遺骨収容派遣が実施された。菅首相の特命により来年度からの硫黄島での大規模遺骨収容に向けての試金石として今回JYMAからは十八名の参加となった。初めてで慣れない厳しい環境の中、大人数での収集ではあったが、一人一人が一柱でも多くお迎えせねばと言つて気持ちで団結して、一生懸命作業に向き合った。

昨年、米側の資料により発見した滑走路西地点の集団埋葬地が作業現場は、戦後、米軍が島の至る所にあつた日本兵の亡骸を迷彩のビニールで包み、両端を針金やロープなどで閉じて放り込んだのである。御遺骨は重なりあい、向きもばらばらで

身体の一部だけで見つかる事が多かった。最初は憤りを感じていたのだが、作業中は迷彩が目印となり完全体をお迎えすることが出来たので不思議なものである。資料によるとこの地点では二千柱近くが埋葬されているが、第四次では四百八十一柱しかお迎え出来ず、収容累計は六百六十三柱である。また、平成二十二年度の硫黄島遺骨収容数は八百二十二柱で四十年ぶりとなる柱数であった。

戦後六十六年経つても、未だこんなに多くの英霊の方々が故郷に帰れずにいる。人は土に還ると言われるが、作業をしていると多くの御遺骨が土と一体化しているのが見受けられる。現在も世界各地に百万と言

う英霊をお迎え出来ずにいるが、どれほどの御遺骨が劣化せずにまだ存在しているのかと考えてしまつた。

忘れ去られていた英霊が積年の思いで本土に戻る事が出来た時、入間基地では千人近くの自衛隊員が敬礼してお迎えしており、引渡式には首相を始め多数の政府要人が参列した。国の為、家族の為、祖国の未来の為、命を投げ打つて戦つてくれた方達を政府が積極的に動き帰還させるのは勿論だが、今の平和な日本を享受している私達もやるべき使命なのではないだろうか。今更と思つては、早く、早急な対応が望まれる。

遺骨収集の存在を知るきっかけとなった硫黄島に、学生最後の派遣で行けた事を感慨深く思います。これまでJYMAの活動を通じ、経験して学んできたことを、改めて振り返り、最後の一柱をお迎えするまで続けていくことの重要性、伝えていくことを誓いました。今回の派遣では関係諸団体の皆様、ご迷惑をお掛けした団員一同に心から感謝の意を表して報告を終わらせて頂きます。

硫黄島派遣に参加して



山際 崇之

(中央大学二年)

私は平成二十二年度第四次硫黄島戦没者遺骨収容・調査・遺骨帰還に先発隊として参加させていだいた。出発する前までに万全を期そうと、硫黄島関連の書籍も数冊読んだ。さらには直前の勉強会で学んだこともありほとんどの事は知つていと思つていた。しかし実際に硫黄島に到着すると、自分は硫黄島についてほとんどわかつていないことに気付いた。

まず私には、「ご遺族の方の視点」というものが完全に欠落していた。ご遺族の方々とお話をする機会が多々あり、その中であるご遺族の方が「未だに自分の父がこんな所に放置されているかと思うと我慢出来ない」と言われたのが非常に印象的であった。

もし自分が同じ立場だったらどうであるか。遺骨収集事業への予算増額は反対意見も多かったという。だが自分の家族が、国家のため、国家の責任において亡くなっていても同じことを言えるだろうか。この一言に深く考えさせられた。

また「旧島民の会の方の視点」も欠落していた。未だに自分が生まれ育った島に帰ることができないのである。もし自分が、先祖の代から住んでいた故郷に二度と住むことができなくなったらと考えるとやるせない気持ちになる。

「戦った将兵の視点」、これについては事前から回顧録や体験談を本にしたものを読んでいたためある程度分かってはいた気になっていた。だがこれも甘かった。実際に作業を始めるとスコップ作業が思ったよりきついことに気づく。数十分作業するだけで腰が痛くなる。しかし実際に満足に水も飲めない環境で壕を掘り、その中で戦っていた将兵はその何万倍も辛く、大変であったろう。作業した体験からも、活字ではわか

らない、実際に行ってみなければ分からない、知れないことも多いと実感させられた。

もちろん遺族の方や旧島民の方、実際に戦った将兵の気持ちも100%理解することは出来ないと思う。しかし話を聞き、実際に体験することによって得られたものは確実にあった。それを後世に伝える必要があると思う。

今回の作業は、滑走路西の集団埋葬地で行った。私は、スコップの使い方すらもとに分かっていない未熟者であったが、旧島民の会の方が丁寧に教えてくださった。作業中は、砂埃によって悩まされる場面や不発弾が発見される場面も多かったが、幸い気温はそれほど高くなく集団埋葬地ということもあり、少し掘るだけで御遺骨が見つかり、次々と収容することができた。しかし収容できた御遺骨はもろくなっており、崩れやすい。お迎えるまでの、六十年という時間はあまりにも長すぎたと実感させられた。今、こうしている間にも御遺骨がもろくなっ

ていくこと、お迎えるのが遅れば遅れるほど御遺骨がもろくなっていくことにやりきれないような悔しさを感じた。

今年度の全収容作業が終了した後、天山で追悼式が執り行なわれた。今年度は、八百二十二柱という例年にはないほどの多くの御遺骨をお迎えることができたが、それでもまだ一万人以上の方が本土に帰れないままとなっている。硫黄島で亡くなった全ての方をお迎えることができず、この事業を継続していかねばならないと思う。

近年、若者は戦争について知らない、とよく言われる。私は知らないというより知ろうとしないのだと思う。学校教育では、戦争について「悲惨だ」「もう二度とあってはならない」などと教えるが、具体的に何があったか答えられる人はごく少数であろう。硫黄島についても二〇〇六年公開のハリウッド映画で知った人が大多数だろうし、遺骨収集事業も広く知られていないのが現状だと思う。もちろん私も戦争はあってはならな

いと思うが、そのために必要なのは過去から目をそらすことではなく、直視し知ろうとする姿勢だと思っ。そして現在の繁栄の礎となった方々の事への感謝の気持ちを忘れないようにしていきたい。

最後になりましたが、硫黄島でお世話になった日本遺族会、硫黄島協会、硫黄島旧島民の会、自衛隊、厚生労働省の方々と今回の派遣に協力してくださった多くの方々にこの場を借りて深く御礼申し上げます。



天山慰霊碑での追悼式にて

祖父が戦死した 硫黄島での遺骨収集



社会人
濱 修一

今回、初めて参加した第四次硫黄島戦死者遺骨収集の参加は、自分自身を見つめなおす派遣でもあった。

私は物心ついた時から、母親や親類から祖父が硫黄島で亡くなっていることを幾度となく聞いており、その硫黄島で遺骨収集をできる機会を得られたからだ。

会うことが叶わなかった祖父によつやく近づけるといふ期待を込め、硫黄島へ赴いた。

入間基地からおよそ二時間、遙か彼方に思っていた硫黄島へは、実際に向かうとわずかな時間だった。島に降り立つと、強い風が吹いていた。風を受けながら島へ来たことを実感すると、それまで長い間、胸に抱えてきた祖父と硫黄島に対する思い

が溢れてきた。そして、様々な想いを巡らせてきた硫黄島を自分の目で見られたことで、どこかすっきりとした気持ちになった。

収集作業を行ったのは滑走路の西にある集団埋葬地。場所は前回より継続中の区域であったため、遺骨を探すため壕などを調査するという苦労は経験しなかった。

だが集団埋葬地での作業は、強い日差しを直接受け、海風に巻き上げられる砂埃に耐えながら埋葬地の土を掻き出す、体力を要するものだった。普段の生活とはかけ離れた作業だ。

私の祖父は鹿児島で商店を営んでいたところ、招集を受け硫黄島へ来た。壕を掘るなど、慣れない苦しい任務が多かったのかと想像をすると、自分の疲れがたいしたものには思えなくなってきた。一柱でも多くの遺骨を持ち帰りたいといふ今回の目標を、作業を続けていく中でより強く感じていった。

派遣団の誰もがそのような想いを持って臨んでいたのだろう、今回の

収集作業は四八一柱もの遺骨を収容しながら、予定を上回って終了を迎えた。

作業がなくなった時間を含む、日々の自由時間をどう過ごすかはそれぞれに任されていた。私は硫黄島戦死者の遺族だが、普段の生活においては遺族同士が会う機会は殆どない。今回同じ宿舎に滞在をしていた硫黄島協会、日本遺族会の方々は、みな硫黄島戦死者の遺族だ。共に過ごす派遣期間中は近くにいることが当たり前のように思えてくるが、実際はとても貴重な時間であった。

そこで、自分以外の遺族の方々がどのような気持ちで遺骨収集に参加し、硫黄島へどのような想いを持ち続けているのか、できる限り話を伺うように心がけ、また自分が長い間抱えてきた気持ちも伝えた。殆どの方が私の上の世代ではあるが、気持ちにはほぼ同じであると感じた。

強く願っているのは、収集を一刻も早く、最後の一柱まで行つこと。そして収集作業中には、出てくる遺骨がどれも家族のものではないか

と、期待を寄せる。まさに自分自身もそうだった。砂に埋まっていた遺骨が、どれも祖父の遺骨ではないかと思いながら作業をしていたのだ。

硫黄島では、遺族の方々と同じ想いを共有できる大切な時間も過ごすことができた。多くの方々の遺骨を見ながら、この島で苦しみながら亡くなった祖父、辛い生活を強いられ、た祖母とまだ幼かった母親のことを考えた。そして彼らのおかげで今の自分自身があることを実感した。

今回、帰還した数多くの遺骨の中に祖父は含まれていなかった。もちろん現場で祖父の遺骨かどうかを判別する術はないが、そのように感じた。

次の遺骨収集では故郷の鹿児島へ持ち帰りたいと思う。しかし次も帰る時に感じることは同じだろう。今回も祖父の遺骨は見つからなかった。それが自分自身を次へとつなげてくれるように感じている。これから可能な限り、その気持ちをもち遺骨収集への参加を続けたいと思う。

学生最後の 派遣を終えて



青山学院大学四年
中村 貴洋

私は学生代表として、最後にすべきことを派遣前までずっと考えていた。個人的には硫黄島派遣に参加したいという気持ちがあったが、来年度のJYMAの可能性を広げるためには沖縄派遣を実現させ、来年度に繋げることが必要だと考え、こちらを選ぶに至った。さらに自分が経験してきたことや培った能力を発揮するにはふさわしい機会になるだろうという確信があり、隊長という役割でもって派遣に参加することになった。

義を見いだせるのかどうか。翌日に後発隊として他のメンバーが到着したときの顔はやはり不安が漂っていた。私は二年の時からJYMAに関わっているが、ムードメーカーというような存在ではなく、人見知りですら話しかけにくいようなタイプではなかったが、この時、今派遣では自分が積極的に話してムードメーカーにならないと成功は絶対にならないと感じた。

次の日の午前中に護国神社にて安全祈願を行い、午後に遺骨収集に取りかかった。収集場所は糸満第八十九聯隊壕で行い、ゴミの多さに衝撃を受けた。まずゴミを処理しないと御遺骨をお迎えてできないのである。その現状と原因が、私たち現代人にあることを知った時は残念でならなかった。ここに戦争という歴史が人々の記憶から風化されていく現実を垣間見たのだった。夜のミーティングで、メンバーもそれぞれ同じことを感じたと言っており、収集初日での現状を見ることができたことは良かったことであろう。また、こ

の日に二柱をお迎えすることができたことも派遣隊にとって大きかった。二月十三日には沖縄県遺族連合会とIVUSAとの合同遺骨収集で、大規模に行なわれた。場所は荒崎海岸で例年と同じ場所であった。その日は十二柱をお迎えする事ができた。遺族会との収集はもちろん、IVUSAとの関わりをもてたことは大きかったと思う。IVUSAとJYMAの学生が混ざる事で、互いに共有できた点や刺激になった点もあったであろう。今後の遺骨収集事業の可能性を広げるきっかけになったと思う。これから二つの団体が合同で活動できたら、多くの若者を巻き込むことができ、戦史についても一度考えるきっかけになるはずだ。

それ以降の日は半日航空自衛隊の見学を挟んだ以外遺骨収集に取り組んだ。場所は糸満大里陣地壕、西原町池田、西原町幸地にて行い、結果西原町池田にて六柱をお迎えすることができた。毎晩のミーティングではその日の活動を振り返り、日を重ねる毎にメンバーそれぞれの考えが固まり始めてきた。ある隊員は、遺族のために、また英霊のために、戦争という事実を忘れないために遺骨収集を行うと。もちろんそれぞれが違う意見であっていいと思う。それが遺骨収集に繋がっているならば。

派遣を終え振り返ってみると、沖縄は四度目だが新たな発見や学べることが多くあった。副隊長の古屋をはじめ、メンバー全員で実現できたと思う。今まで使わせてもらった宿がなくなり、新たな宿で自炊をしなければならぬということ、今派遣で重要な部分だった。そこで全員が協力し無事終えられたことは本当に良かった。また個人として、最後の派遣で今回のメンバーに出会い一緒に派遣に行けたことを誇りに思う。そして今後の彼らの活動に、JYMAの発展に、これからもできる限りの協力をしたいと決意した。

最後になりましたが、協力してくれた次期代表をはじめとした仲間、ご支援していただいた方々、本当にありがとうございました。

伝える大切さ



日本大学 三年
古屋 沙知

昨年に引き続き、二度目の沖縄派遣だった。

今年は前回の沖縄派遣の経験を生かすために副隊長として参加することになった。今まで沖縄以外に行つた派遣はなかったため、大変不安に思つことも多く他の隊員に迷惑をかけることもよくあつた。そのような中で、行く前と帰ってきた後で大きく変化したことがあつた。

私は沖縄に行く前はこの派遣を最後の活動にしようと思つてた。理由は他にもやりたいことがあり、両立するのは大変な負担になると考えたからだ。しかし、沖縄に行つてみると気持ちが大きく変わり、次は自主派遣ではなく、政府派遣として沖縄以外の場所に行きたいと思つようになった。なぜこのような気持ちに

なつたかというところ、昨年会つた人や行つた場所などを私自身が予想以上に覚えていて、その人と直接話したり、他の隊員に伝えたりすることができたからだ。また新たな出会いもあり、より沖縄について、戦争について、命について考えるとても良い機会をつくることができた。

収集初日、糸満市の新垣にある歩兵第八十九聯隊壕は昨年も行つた場所であつた。壕の中はゴミだらけでその中から御遺骨が見つかることもある。自分が昨年行つたという経験を活かして火炎放射でこの壕が焼かれたこと、その証拠として壕内の壁が黒くなっていることなどを伝えた。

遺族会との合同収集で向かつた荒崎海岸では遺族会の中に話したことのある私と同じ年の人もいたし、昨年私が沖縄に来たことを覚えていた人もいた。それだけでなく、戦時中の荒崎海岸の様子を伺つことができた。荒崎海岸が昔はどのようなところだったのか、またどんな戦争が展開されていて、米軍はどのような生活をしていたのかを知ることができ

た。昨年聞いたことがあつたからこそ、さらにその場所について質問することもできたし、他の隊員たちに伝えることができたと思つている。

そしてそのおかげで今年初めて作業を行つた西原町池田や幸地、糸満大里陣地壕でその土地について考えようと思つたし、たくさん質問しようという意欲が自然とわいてきた。自分が知つたことをみんなに伝えたいと思つた。

家に帰ってから自分が書いた昨年の沖縄派遣の報告文を読んでみると、私はもつと知らなくてはいけないと書いていた。自分が教師になつたときに戦争の事や遺族のことを話せるようになって事実を伝えていきたいと思つていた。あのときの気持ちと同じであることに気がついた。

今回沖縄派遣に参加した隊員達はみんな自分で深く考え、発言できる人たちだった。その自分分の知らないことに気がつきたし、私自身ももつと考えられるようになったと思つた。私の周りにいるんな考えを持

つた人たちがいてくれたこと自体がとても刺激になつてた。

共同生活ではいろいろ大変なこともあり、お互いにちょっとだけ直すべきと感じる部分もあつたけど、みんなで力をあわせてやらなくてはいけないことが多かつたからこそ、たくさん話をして考えを深めることができたのだと思つている。

私にはまだまだ知らないことが多い。政府派遣のことや、遺族の方たちは私たちの活動をどう感じているのか。これだけ心が動かされるのだから自分自身でしっかり道を作つて進んで行きたいと思つ。私は伝える人になりたい。そのためには自分自身がしっかり経験して話をして話を聞きに行くことが大切だと思つている。

五十年後、戦争経験者ももう日本に残っていない。ただの物語としてではなく、少しでもリアルを伝えられるように。戦争があつたという事実を、あのとき起こつたことを伝えて二度と繰り返さないようにしなければならぬ。

NPO JYMA日本青年遺骨収集団 平成22年度 慰霊祭・活動報告会

懇親会(四年生壮行会)のお知らせ

日頃よりJYMA日本青年遺骨収集団を温かく見守っていただき、
誠にありがとうございます。

さて、本年度、各戦域や抑留地からお迎えした戦死者・抑留中死亡者の慰霊祭、
及び平成22年度の活動報告会を今年度も実施することとなりました。
お忙しい中とは存じますが、派遣期間中を始めいつもお世話になっている皆様には、
是非ともご参加していただきたく思います。

日 時：平成23年3月12日

13 時 ～ 慰霊祭

14 時 ～ 活動報告会

17 時 ～ 懇親会及び4年生卒業慰労会

場 所：靖国神社

活動報告会終了後、九段会館へ移動

参加費：玉串料 2,000円・懇親会 3,000円

御参加頂ける方は、下記連絡先までお電話、メールもしくはファックスにて
御一報下さいますよう、お願い申し上げます。

特定非営利活動法人 JYMA日本青年遺骨収集団 事務局

TEL 03 - 6 2 6 8 - 9 9 3 9

FAX 03 - 3 2 3 9 - 0 1 0 9

e-mail : info@jyma.org

編集後記

今月号より遺烈の編集に加わらせて
いただくことになりました瀬尾昌
平と申します。自分にこのような大
役が務まるかどうか、些かの不安は
覚えておりますが、過去の先輩方と
同様、素晴らしい記事を皆さまにお
届けできるよう尽力してまいります
ので、どうぞよろしく願いますし
ます。さて遺烈編集だけでなく、J
YMAも世代交代を迎えておりま
す。まだまだ足取りも不確かな状態
ですが、こちらも温かく見守ってい
ただければ幸いです。
(瀬)

硫黄島の引渡式にて、菅総理大臣
が追悼文を読み上げた。気持ちの籠
つていない棒読みな印象を受けたの
は私だけか？硫黄島派遣では生活
面でも苦労するところが多かったよ
うだ。硫黄島派遣経験者として、そ
ういった本質と違う部分で問題が起
こるのは心苦しい。硫黄島遺骨収容
事業は、話だけが大きくなって現場
の仕組が追いついていない印象があ
る。今派遣の反省点を、誰しもが見
つめなおす必要がある。
(美)